

(ワークショップ「市民と医療者との対話型ワークショップ」)対話を通して自分らしい人生を考えよう

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三浦, 靖彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00033418

対話を通して自分らしい人生を考えよう

三浦 靖彦

(東京慈恵会医科大学附属柏病院 総合診療部長 教授)

【アドバンス・ケア・プランニング (ACP) とは?】

ACP の概念については、従来海外の ACP の翻訳が用いられ、概念的な統一がされておらず、事前指示や POLST、DNAR との混同もありましたが、日本医師会が 2018 年 4 月に ACP に関するパンフレットを公開しました。その説明によると、

「将来の変化に備え、将来の医療及びケアについて、患者さんを主体に、そのご家族や近い人、医療・ケアチームが、繰り返し話し合いを行い、患者さんの意思決定を支援するプロセスのことです。患者さんの人生観や価値観、希望に沿った、将来の医療及びケアを具体化することを目標にしています」

と表現され、理解しやすい表現にまとめられました。

要するに、終末期の医療行為のみを考えるのではなく、「どこで、どのような暮らし方をして、どのような形のケアを受けながら暮らしていきたいか?」を考えることなのです。

2022 年 9 月に、宮下らの研究論文「Culturally Adapted Consensus Definition and Action Guideline: Japan's Advance Care Planning」が発表されましたので、是非ご一読下さい。

(<https://doi.org/10.1016/j.jpainsymman.2022.09.005>)

【ACP は何故必要なのでしょう?】

医療・ケアの方針決定の際に、本人が常に意思表示できるとは限りません。また、事前指示や POLST (生命維持治療に対する医師の指示) など、医療行為に対する希望は、指示をしたときから、実際に必要となるときまでの時間経過の中でも変遷しますし、その際の病状によっても変化するため、余り有効とはいえません。

しかし、事前から本人の価値観、人生観、死生観等が周囲の人に共有されていれば、本人が意思表示できなくても、本人の意思が尊重された医療・ケアの方針が立てられる可能性が高くなります。(推定意思)

また、本人の意思を尊重できたという満足感は、家族等関係者の心の負担を軽くする効果も期待されます (グリーフ・ケアにも効果がある)。

したがって、折に触れて、医療・ケアの内容だけでなく、価値観、人生観・死生観などについて関係者と話し合っておくことが大切なのです。

【どのようなことを話し合っておけばよいのでしょうか？】

- ・本人の今までの生活史が基本となります。大切にしてきたこと、今大切と思っていること
- ・これからをどのように過ごしていきたいか（どこで、誰と、どのように？）
- ・家族等大切な人に伝えておきたいこと
- ・やっておきたいこと、やらなければいけないこと
- ・医療やケアに対する思い
- ・積極的治療を望むか、緩和的医療を望むか？ それはどのような理由から？

これらを考えることによって、自分自身の人生に対する思いが明確になり、自分がこれからの人生をどのように過ごして行きたいかが明確になってきます。一番大切なことは、「人生の最終段階において、一分一秒でも延命すること」ではなく、「自分なりに十分生ききった！」と実感できることではないでしょうか。そして、家族等関係者にとっても「この人は十分に生ききった！」と確信できることにより、悲しみの中にも、ある種の満足感・安堵の思いが芽生えるのではないのでしょうか？

【おわりに】

医療行為についての希望（事前指示、POLST）は、置かれた状況、病状によって揺れ動きます。しかし、本人の価値観、価値観、死生観などは、大きく変わることはありません。従って、自分の価値観、人生観、死生観を再発見する上でも、気の合う人たちと「もしバナゲーム」をしながら、人生について話し合う機会を継続して持ち続けることをお勧めいたします。
